

国道から見た空の色

池田 真也

盛田・・・25歳。運送会社に勤める運転手。彼の会社は家具の配送から長距離まで、運送業ならなんでもこなす。

旅の生活にあこがれている

奈保子・・・23歳。女優を夢見る定食屋の看板娘。

貝塚・・・20歳。旅好きな学生アルバイト。

鹿島・・・25歳。盛田の同僚。結婚して子供がいる。

黒木・・・19歳。貝塚のあとから入って来た学生アルバイト。

#とある団地の駐車場。トラックの運転席からぼんやり外を眺めている盛田。汗だくになって帰ってくるバイトの貝塚。

貝塚ドアを明けて入ってくる。

盛田「どうもごくろうさん」

車の中はクーラーがきいている。

貝塚「ああ涼しい」

盛田「いたか」

貝塚「ええ。（品物受け取りのサインを盛田に渡す）ここエレベーターないんスね。きつかったっスよ」

盛田「ここねえんだよな。5階だてのくせによ。…いこうか」
エンジンをかけて走りだす車。

貝塚「次はどこですか」

盛田「南千住。団地の4階」

貝塚「エレベーターあるんスカねえ」

盛田「ない」

貝塚「マジっすか。…それでもものは」

盛田「すごいぞ。…ベッドにテーブル、椅子が4つに洋服ダンス」

貝塚「嘘でしょ」

盛田「伝票を貝塚に見せる。」

貝塚「勘弁してよ。…くそ暑いのによう」

盛田 「こういう日もあらあな。お前ベッド組み立てられるか？」

貝塚 「いいえ」

盛田 「じゃあ、最初にベッドとタンスを二人で運んで、俺がベッド組み立てるから、その間にお前はテーブルと椅子を運ぶ……と」

貝塚 「ええ？（独りごちる）何往復すりゃいいんだよ。まったく」

盛田 「バイトが文句言ってんじゃねえよ」

貝塚 「やりますよ。やりやあいいでしょ」

#2 南千住の団地

大きなタンスをかついで階段を昇る盛田と貝塚。

#3 車の中

盛田 「おまえさあ、ほとんど毎日来てるけど学校のほうは大丈夫なのか？」

貝塚 「ほとんど出席とらないんすよ。出てもつまんないですしね。

バイトして金ためたほうがまだいいかなって」

盛田 「たまったか」

貝塚 「ええ。ぼちぼち。俺ね、終わって金もらうでしょ。そうしたらその足で銀行行くんすよ。そっくりそのまま預けるの。意外でしょ」盛田 「堅実だな、お前。それで、ためてどうするんだよ」

貝塚 「旅するんすよ。今、50万たまったんで、またどっか行こうかって思ってるんすけどね」

盛田 「どこ行くんだよ」

貝塚 「中国行こうと思うんすけどね。船使えば往復5万でいけるルートがあるって言うし」

盛田 「安いな。今までどこか行ったのか」

貝塚 「インドネシアとニューヨークとあとトルコに行つて、それとトランジットの時にタイに寄りましたね」

盛田 「一人で行くのか」

貝塚 「ええ。もちろん」

盛田 「すげえな」

貝塚 「みんなそう言いますけどね。行っちゃえば大したことないですよ」

盛田 「危なくねえのかよ」

貝塚 「大丈夫ですよ。だって外国で日本人が死んだらニュースになるでしょ。それぐらい少ないんですよ」

盛田 「いいねえ。暇も金もある奴は。俺も旅がしてえなあ」

貝塚 「してるじゃないですか。この間も姫路まで行ってきたんですよ」

盛田 「明日、秋田なんだよ。朝4時に来いってき。…日本は飽きた

よ。外国に行きてえなあ。世界一周旅行とかしてえんだけだな」

貝塚 「世界一周かあ：：それもいいなあ。盛田さん今まで海外へは？」

盛田 「ない。俺ガキの頃から旅がしたかったんだけどよう、：：最初船乗りになりたかったんけどな。：：有名な絵でさ、南の島で黒人の女が寝てるやつあるじゃん。知ってる？」

貝塚 「ゴーギャンですか？」

盛田 「名前忘れたけどさ。あれ中学ンとき授業でみてからさあ、あんなところに行ってみてえなあつて、ずうっと思ってたんだけど：：まあ、結局輪っば転がしになったけどよう。日本も行ってねえところほとんどないし、：：なんかまた最近なあ：：外国いきてえなあ」

#食堂

行き着けの定食屋で。看板娘の奈保子（23）がメニューで盛田の肩をたたく。

奈保子 「よう盛ちゃん。姫路に行つて来たんだつて？どうだった？」

盛田 「もう最高よ。関西は美人ばかりだね。右を見ても左を見ても、もう大変」

奈保子 「（皮肉っぽく）そいつは良かったじゃん」

盛田 「それでも奈保子ちゃんよりいい女はいなかったな。日本中

どこ行ってもいない」奈保子「バカ。(メニューで盛田の頭を叩く)
日替りふたつでいいね。(去って行く)」

盛田 「あつ、ご飯大盛りにしてよ」

#同
レジ

奈保子 「ひとり10万630円」

貝塚 「おれ丁度ね。はい630円」

奈保子 「10万円たりないなあ。そのぶんは盛田さんに払っていた
だきましよう」

盛田 「貝塚、先に行ってる」

貝塚 「え？」

盛田 「伝票まとめといてくれ」

貝塚 「ああ。はい」

奈保子 「盛ちゃん、20万630円ね」

盛田 「ねえねえねえ」

奈保子 「なによ？」

盛田 「今度の日曜暇？」

奈保子 「え？別に予定はないけど」

盛田 「映画でも見に行かない？」

奈保子 「ええ？…どうしようかな」

盛田 「どうせ暇なんだから。いいじゃん。行こうぜ」

奈保子 「でもカズオにヒロシにマサカズがなんて言うかな」

盛田 「なに言ってるんだよ。ンなもんいるわけねえだろ」

奈保子 「(ちよっとムツときて) なにそれ? わかった行かない。あたしこれでも声かけてくる奴多いんだからね」

盛田 「誤解だよ誤解。そりゃこんなに綺麗で性格のいい子に声かける奴はいっぱいいるだろうさ。でも奈保ちゃんは誰にでも簡単について行くような軽い女じゃあない。しっかりしてるところはしっかりしてるからな。そういう意味だよ。そういう意味。じゃあ横浜に行こう。車出すよ。中華街でご飯食べてさ、ベイブリッジ行こう。湘南もいいね。海で夕焼け見るっていうのはどう? ね、いいでしょ」

奈保子 「自分の車持ってるの?」

盛田 「新車があるんだよ。新車が」

奈保子 「・・・(うなづいて) わかった。いいよ」

盛田 「ようし。決まり! じゃあ10時にその郵便局の前ね。絶対だよ。じゃあね」

奈保子 「盛ちゃん。(お金)」

盛田 「あつ髪形変えたね。似合ってるぜとつても。前よりも全然いいよ」

奈保子 「そう?」

お金を払わず出て行く盛田。

#同 駐車場

盛田 「ようし。行こうぜ」

貝塚 「次は？」

盛田 「フナバシ。ランプひとつ（アクセル）」

#日曜日。待ち合わせ場所。

待っている奈保子。

盛田 「（クラクション）奈保子ちゃん」振り返る奈保子。

奈保子 「なにそれ！」

新しいトラックで現れた盛田。

奈保子 「何が新車よ」

盛田 「新車じゃねえか。新しい2トントラック」

奈保子 「もう・・・」

盛田 「さあ乗った乗った」

#トラックの中。

奈保子 「へえ。シートが高いんだね」

盛田 「眺めがいいでしょ」

奈保子「私トラク乗るの初めて。面白い」盛田「でしょ」

#遊園地

ジェットコースターに乗っている盛田と奈保子。大声をあげる。

#夜の横浜。誰もいない港の埠頭。

トラクが止まる。降りてくる盛田と奈保子。奈保子「今日は楽しかった」

盛田「そう。・・・良かった」

遠くに明かりが灯る。

盛田「奈保子ちゃん。田舎はどこだよ」

奈保子「新潟」

盛田「新潟のどこ？」

奈保子「言ってもわかんないよ」

盛田「いいよ。どこだよ」

奈保子「中条」

盛田「北の方だね」

奈保子「知ってるの？」

盛田「新発田、中条、紫雲寺。・・・詳しいでしょ」

奈保子「そっか。そうだよ。…なんにもないところよ」

盛田 「そんな感じだよ。…何でこっちに出てきたんだよ」

奈保子「何でこっちに來たか？…笑わない？」

盛田 「笑わないよ」

奈保子「絶対」

盛田 「約束するよ」

奈保子「あたし女優になりたかったんだ」

盛田 「…」

奈保子「(笑いながら)おかしくない？」

盛田 「いや。…いいんじゃない」

奈保子「小さいころからさ、みんなの前でお芝居するのが好きでさ。

なんか他人になるって気持ちいいじゃん。…それで高校卒業して東

京に出て来て、劇団とか受けまくったんだけど全部落ちて…。今で

もねオーディションがあると応募してるんだ」

盛田 「知らなかったよ」

奈保子「でもだめだよ。もうこんな年だし」盛田 「何言ってるんだよ。

今23だろ。まだまだ若いじゃないか」

奈保子「デビューするなら遅いわ。もう新人どころか、売れてる子み

んな私より年下ばかりだし」

盛田 「…」

奈保子「盛ちゃん、なんか部活やってた？」

盛田 「高校ん時野球やってた」

奈保子「甲子園目指してたんだ？」

盛田 「まあね。結構強かったんだぜ」

奈保子「どこまでいったの」

盛田 「準々決勝までいったんだけどな。代表になったところに負けたんだよ。2点差で」

奈保子「負けた時のこと覚えてる？」

盛田 「そうだな…俺一塁ランナーだったんだよ。最後のバッターがショートゴロで二塁に送って俺がフォースアウトになって…：負けの時はさあ、何にも思わなかったなあ。負けた気がしなかったんだ。…でも挨拶して、ロッカーにもどった時なんだけど、エラーした奴がさ、サード守ってたやつなんだけどな、そいつがずっと泣いてんだよ。まあみんな泣いてたんだけどさ、そのサードの奴はすげえ大きな声で泣いててさ、それ見てたら『ああ終わっちゃったのかな』って」

奈保子「盛ちゃんも泣いた？」

盛田 「一人になったときにな。夜寝る時に」奈保子「スポーツってさ、負けた瞬間がわかるからいいよね。ゲームが終わって、あなたはだめだよって言うてくれるじゃない、でも普通はさ、夢なんて気づか

ないうちに、少しずつ消えていくんだって思う」

盛田 「って言うとは？」

奈保子「最近はさ、どうでもいいなって思うんだ。忙しいしね。…後から考えたら『ああ、あのとき』ってわかるのかもしれないけど…どんなことでもそうだけども、大切なことって、その時にはわからないもんだよね。…結局さ、そこらへんのつままない男と結婚してつままない主婦になるのよ。(笑う)それもいいかなって」

盛田 「でもさあ、つままないと思ってた男が以外にまつてることがあるかもよ」

#ホテル

奈保子は盛田の腕枕で寝ている。奈保子の寝顔を見ている盛田。

#半年後。横浜を走る盛田のトラック。左手には海が広がる。

#会社

夕方。盛田が仕事を終えて帰ってくる。

貝塚が社長と話している。

盛田 「あつ社長。お疲れ様です」

貝塚 「お疲れ様です」

社長「お疲れ。盛ちゃん。貝塚君今日でおわりなんだよ」

盛田「何だよ。やめるのかよ。金が安くてやってらんねえってか」

社長「バカヤロ。…旅だよ。旅行行くんだってよ」

盛田「そうか行くのか。お土産かってきてくれよな」

貝塚「いやあ、今度のは長いんすよ」

盛田「どれぐらい」

貝塚「一年ぐらい行って来るんすよ」

盛田「二年」

社長「世界一周だってさ」

盛田「中国じゃないのかよ」

貝塚「最初はそのつもりだったんすけど、前に盛田さん、世界一周が夢だったって言ってたじゃないっすか。あれ聞いて世界一周もい

いかなって。ちよつと学校休学して行って来ますよ」

盛田「簡単に言うねえ」

貝塚「簡単っすよ」

盛田「金かかるだろ」

貝塚「百万たまったんで、なんとかかなりそうなんすよね。まあ無くなったら帰ってきますけどね」

#盛田のアパート

風邪をひいた。会社に電話をする盛田

盛田「：：すいません。：：明日からまたしつかりやりますんで：：
わかりました。じゃあ」受話器をおく。パジャマ姿。かなりつらそう。
冷蔵庫をあける。中には何もない。

再び受話器をとる。

盛田「もしもし。奈保子。：：実は風邪ひいてさ。ひどいんだ。：：
見舞にきてよ。：：いいじゃん一日ぐらい。：：じゃあ。終わってか
らでいいからさ」

ふとんにもぐりこむ。天井を見つめる。

激しく咳きをする盛田。

鹿島の家

鹿島は盛田の同い年の同僚。彼はすでに結婚しており、子供もいる。
盛田は酒と食事をごちそうになっている。鹿島のひぎには2歳にな
る子供。

盛田「お前さあ、結婚する前としたあとじゃ、何が一番変わった？」

鹿島「なんだろうな。：：そりゃ自由にはできないわな。金だって好
き勝手には使えねえし。：：まあ、今は自分のために生きてるって
うよりは家族のために生きてるっていう感じかな」

盛田「でも楽しそうだな」

鹿島 「結構これで大変だぜ。(妻をさして)あれともしよっちゅうケンカしてるしよ」

盛田 「そんなふうには見えないけどな」

鹿島 「つきあってた時はさ、ちよつとした仕草がな、かわいく思うんだよ。でもな今じゃ、そういうことが、すつげえうつとうしいんだよ」

盛田 「結婚したこと後悔してるか？」

鹿島 「…いや。でも悪くないぜ。帰ったときに落ち着くしな」

盛田 「子供はかわいいか…」

鹿島 「めちやめちやかわいい。お前、子供はいいぞ。…お前もしかしたら結婚しようと思ってるのか」

盛田 「そんなんじゃねえよ」

鹿島 「奈保子とか。もうそこまで話は進んでるのか。お前、結婚しろ。いいぞ結婚は。奈保子はいい娘だ。結婚して正解」

盛田 「違うって。…(ため息) 結婚しよっかな」

鹿島 「しろしろしろしろしろしろ」

#茨城の国道

盛田と新しいバイトの黒木を乗せたトラック。ミラーの横に貼ってある奈保子と赤ん坊の写真。

黒木「なんですか、これ」

置いてあった絵葉書を取る。

黒木「『いま僕はイスタンブールにいます。親切そうに近づいてくるやつらはみんな嘘つきですぐにだまそうとします。でも元気でやっています。盛田さんもお元気で。貝塚隆男。』誰ですか？」

盛田「お前がくる前にいたバイトだよ。世界一周旅行してるんだだよ」

黒木「世界一周か。いいですね」

盛田「旅してえなあ」

黒木「これもちよつとした旅じゃないですか。俺長距離の助手って初めてなんですよ。やっぱり東京まわってるよりもいいですね」

盛田「・・・旅かなあ。・・・」

やっぱりこんなもん旅じゃねえよ」

ため息。

国道を走るトラック。

終わり。